

# 「魂の哲学」としての意識研究

池原 優斗 (Yuto Ikehara)

北海道大学

本発表では、現代の意識研究が、文化人類学者のエドワード・B・タイラー (1832-1917) のアニミズムに関する議論における「魂の哲学」に含まれる営為であることを主張する。まず、議論の前提として本発表では、意識研究が科学的研究であることを前提とすることなく、宗教的实践等を含む何らかの共通する目的を持った実践として捉える。次に、現代の意識研究についてその概要を示す。そして、タイラーのアニミズム、および「魂の哲学」についての議論を紹介する。最後に、現代の意識研究がこの意味での「魂の哲学」に含まれることを示すにあたり、意識研究が「魂の哲学」の2つの特徴にあてはまることを主張する。

なお、本発表では科学的な知と呪術等の宗教的知を本質的に区別しない人類学の存在論的転回以降の議論を前提として考察を行う。存在論的転回において重要な議論であるアクターネットワーク理論では科学的実践と宗教的实践は、「原理的に違いのないネットワーク形成の運動として把握され」、本質的な違いのない「対称的」な実践として捉えられる [久保 2019]。したがって、呪術等の宗教的な知を本質的に科学と異なった知ではなく、並置され繋がりうるものとして扱う。

## 1. 現代の意識研究とは何か

現代の意識研究は、主観的な意識経験とその物質的な基盤の関係性を探求する分野である。具体的には、物理的な脳の活動と主観的な意識体験の関係に関する議論や、AI等に意識を持たせる「人工意識」の研究、マインドアップローディングに関する議論、自由意志に関する実験研究を踏まえた議論等が含まれる。このようなテーマを扱う意識研究は異分野融合的であり、哲学、神経科学、情報工学といった分野が関係する。

## 2. アニミズムと「魂の哲学」

タイラーはアニミズムに関する議論の中で「魂の哲学」という概念を論じている。タイラーはアニミズムについて議論するにあたって、宗教の最小限の定義を「諸々の霊的存在への信念」 [タイラー 2019] としている。そして、アニミズムを「諸々の〈霊的存在〉についての教理」、「〈唯物論的哲学〉の対極にある〈心靈主義的哲学〉の本質を具現する教理」と定義する [タイラー 2019]。

タイラー [2019] は「アニミズムは魂の哲学とその他の霊の哲学に大別される」の節において、アニミズムを「単一の思想を構成する二つの重要な教理」に分けられると論じている。1つ目は (1) 「個々の生き物の魂に関する教理で、死や肉体の消滅のあとも魂は存続しうる」というものであり、これが「魂の哲学」にあたる。もう1つの教理は (2) 「それ以外の霊に関する教理で、高位の霊的存在には強力な神々も含まれる」とい

うものであり、これは「その他の霊の哲学」にあたる。

本発表では、意識研究の実践は、タイラーによって議論されたアニミズムの2つの教理のうち、「魂の哲学」の実践に相当すると主張する。

### 3. 意識は魂のように死後も存続するか

タイラーが論じる「魂の哲学」の特徴のうち、個々の生き物に魂を見いだすという点は、意識研究における意識に対する態度と通じる。その一方で、「死や肉体の消滅のあとも魂は存続しうる」という点については、意識研究における意識に対する態度と共通するかは容易には分からない。

本発表では、意識はタイラーが論じた魂のように死後も存続するのかについて、死の定義を生物学的な身体が活動をしなくなることと考えるのであれば、意識は死後も存続しうる概念であることを主張する。この定義について、魂や意識が存続する場合、それは死なのか、という問題がありえる。しかし、タイラーの議論を前提とするのであれば、魂が死後も存続すると述べている時点で、魂が存続は死とは切り離されて考えられている。したがって、ここでは、タイラーの議論との整合性を踏まえて、死の定義を生物学的な身体が活動しなくなることとして議論を進める。

意識研究には、意識をコンピュータ等に移植するマインドアップローディングに関する議論も含まれる。こうした議論は、沖永 [2018] がそう呼ぶように、「身体の死後に意識を存続させる試み」とも言える。身体の死後に意識が存在しうるかどうかには様々な立場が存在する。しかし、本発表の主眼は、身体の死後に意識が存在しうるかを問うことではなく、意識はタイラーが論じる魂のように死後も存在するという信念を持つことができる概念であるかという点である。ある営為が「魂の哲学」であるかを分けるものは、死後も存続可能な魂という概念を持ち、そうした魂について関わり思考し行為する否かである。よって、魂が本当に死後も存在しうるのか、もしくは、誤った信念であるかを考慮する必要はない。その観点から踏まえれば、そもそも、意識が死後も存在するという思考可能である時点において、思考可能性論法の通り、意識は死後も存在しうる概念なのである。

意識は死や肉体の消滅のあとも存続しうるという特徴を満たしており、したがって、意識を探求する実践である意識研究は「魂の哲学」と呼べるものである。

本発表では、現代の意識研究について紹介した後、タイラーの「魂の哲学」についての議論を提示し、意識概念が「魂の哲学」における魂の二つの特徴を満たしており、現代の意識研究が「魂の哲学」に含まれることを主張する。

#### 【参考文献】

沖永宜司 2018「身体の死後に意識を存続させる試みについての哲学的考察」『人間存在論』24: 33-46.

久保明教 2019「呪術と科学 私たちは世界といかにかかわっているのか」松村圭一郎・中川理・石井美保編『文化人類学の思考法』世界思想社 pp. 44-56.

タイラー, E. B. 2019『原始文化〈上〉』松村一男監訳 国書刊行会.